

11月第3週の礼拝説教

■日 時：2022年11月20日（日）10：30－11：30 降誕前第5主日

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「救いをもたらすために」

■聖 書：ヘブライ人への手紙9章23～28節（新約p411）

■讃美歌：149「わがたまたたえよ、主なる神を。」458「信仰こそ旅路を みちびく杖」

本日は、私たちの立川教会では「降誕前第5主日」として礼拝をささげています。しかし、この日は、待降節から始まる教会の暦で一年の最後の主の日になることから、「終末主日」、「収穫感謝日」、「謝恩日」などとして礼拝をささげている教会もあります。この一年を振り返り、主に与えられた多くの恵みを数えながら一年の終わりを覚えるとともに、主イエスが再び来られるときを覚える日でもあります。聖書は、私たちの置かれているこの世界には私たち人間が日常的にとらえることのできるこの世の時の流れと、主なる神のご支配される時の流れがある、ということ述べています。主なる神のご支配される時の流れがこの世の時の流れに介入して来られる時、たとえば、それは主イエスの降誕の時であり、それはまた、主イエスが再びおいでになるという再臨の時でもあるのです。

そのようなことを考えながら、本日の聖書の箇所ヘブライ人への手紙9章23節から28節をご一緒に読んでまいりましょう。この箇所は、私たちが主日礼拝に必ず告白している使徒信条との関連を考えますと、使徒信条の中心部分であるイエス・キリストに対する告白「**我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊（せいれい）によりてやどり、処女（おとめ）マリヤより生れ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府（よみ）にくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり、かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審（さば）きたまわん。**」の締めくくりの部分である「**かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを裁き給わん。**」に該当します。9月4日の主日礼拝から始めました使徒信条の内容を聖書の箇所と関連付けて深く考えてみるということは、本日の聖書箇所からも読み取っていくことができると思います。特に28章の「**キリストも、多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるのです。**」は、主イエス・キリストの再臨を待ち望む教会の希望の根拠の一つであると、考えられてきました。

イエス・キリストは私たち人間を罪から救うためにこの世に来てくださったのです。それが、私たちがこれから待降節を経て迎えるクリスマスの出来事です。しかし、主イエスのこの世での伝道をはじめとするさまざまな働きと十字架での死では、その救いの業はまだ完成していません。ですから、イエス・キリストは再び、この地上に来てくださるのです。その時には誰もがこの方が神であると分かる復活の栄光に包まれた姿で来てくださるのです。「かしこ」というのは「彼処」と書いて、遠く離れた場所を指します。日本人にとってなじみのある仏教用語では、この世とあの世を区別するのに、「此岸（しがん）」と「彼岸（ひがん）」という言葉を用います。彼岸とは生死の海を渡った向こう岸という意味です。一方、キリスト教では「かしこ」というと、広い意味では天の国のことを指しています。しかし、より具体的に言うと、「かしこ」というのは、イエス・キリストが今おられる所、すなわち、「全能の父なる神の右」を表しているのです。イエス・キリストはそこにおいて、真（まこと）の神として私たちを支配しておられるのです。けれども、今はまだ私たちにはその姿は目には見えません。私たちの目には隠されているのです。しかし、終わりの日には目に見える姿で、イエス・キリストがこの世に来てくださるのです。遂に、私たちは顔と顔を合わせてイエス・キリストを見る時が来るのです。すべての覆いを取り去られる時が来るのです。

しかし、イエス・キリストは一体何のために、終わりの日に再びこの地上に来られるのでしょうか。使徒信条はそれを「**生ける者と死ねる者とを裁き給わん**」と告白しています。「生ける者」というのは、イエス・キリストが再びこの地上に来られる時に生きている人々のことです。生きてイエス・キリストを見るのが許される者たちのことです。それに対して「死ねる者」というのは、すでに死んだ人々のことです。すでに死んだ人々も終わりの日には目を覚まさせられて、必ずキリストの裁きの座の前に立たされるのです。最終的にその人が救われるかどうかは、その裁きの座において決定されると考えられています。そこで救いに定められた人は永遠の命に復活することが許されるのです。それに対して、滅びに定められた者は永遠の死に定められることとなります。このような裁きが終わりの日には起こるといえるのです。私たちはこのことをどれほど真剣に受け止めているのでしょうか。私たちの信仰生活においては、この世のことばかりを考えて生きていないのでしょうか。しかし、もし最後の日に、人の目には隠されていたことがすべて明るみに出され、私たちはその行いに応じて報いを受けるというのであればどうでしょうか。私たちが人の目に隠れて行った悪、心の中で考えた悪い思いも、すべて明るみに出されるとなったら、私たちの行動の仕方は変わってくるように思います。そのように、「終わり」が確かに指し示されるとき、今現在の私たちの歩みがはっきりと見えて来て、私たちは主なる神様の

ほうに向きを変えることができる、というのが、キリスト教の終末論と言えるでしょう。そして、終わりの日には、この方が私たちの所に来てくださるのです。私たちの罪のために十字架に架かって死んで下さった方が裁き主として来て下さるのです。最後の裁きを下されるのはイエス・キリストなのです。私たちの所に再び来られる方がこの方であると信じるならば、終わりの日は私たちにとって、恐ろしい日ではなく、希望の日となります。今一度繰り返しになりますが、ヘブライ人への手紙の著者が確信をもって私たちに伝えている「キリストも、多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるのです。」という御言葉を、キリスト教の暦では一年の終わりの日である今日という時に、そして今という瞬間に、「アーメン、本当にそうです」としっかりと受け止めたいと思います。そこから、私たちは希望をもって、前を向き、終わりの日に向かって歩みだしましょう。